

七瀬ふたたび

筒井康隆



ななせ
七瀬ふたたび

新潮文庫

草 171 = 7



著者
筒井 康隆つづい やすたか

発行者
佐藤 亮一

発行所
株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部〇三三二六六一五一一
編集部〇三三二六六一五四〇

振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

Ⓐ 印刷・大日本印刷株式会社 製本・憲專堂製本株式会社

© Yasutaka Tsutsui 1978 Printed in Japan

ISBN4-10-117107-6 C0193

新 潮 文 庫

七瀬ふたたび

新 潮 社 版



目次

邂逅	七
邪惡の視線	五二
七瀬時をのぼる	五五
ヘニーデ姫	一三八
七瀬森を走る	一八二

解説 平岡正明

七瀬ふたたび

邂^{かい}

逅^{こう}

逅

地ひびき。震動。

横なぐりの衝撃。

傾く車体。悲鳴。ガラスの割れる音。

巨岩の重みにねじ曲る鉄骨。折れてはじけとぶ木材。悲鳴。

横倒しになった客車。暗黒。シートの下敷きになって泣き叫ぶ乗客。散乱した網棚の荷物。怒

鳴る声。悲鳴。悲鳴。

叫ぶ声。「崖^{がけ}くずれだ」

その声がさらに悲鳴を呼び、悲鳴がさらに拡がる。拡がる悲鳴がさらに新たな恐怖を呼ぶ。

「まだ、落ちてくるぞ」

「岩が落ちてくるぞ」

ああ、と大声をあげ、七瀬^{ななせ}は目醒^{めざ}めた。

夢か、と思い、吐息をつきながら車内を見まわす。

眠っている乗客、雑誌に読み耽^{ふけ}っている乗客、車内は七瀬がうとうとする前と何の変わりもない。

自分のあげた大声も夢の中のことと知り、彼女はまたほっとした。

夜汽車は雨の中を、崖に沿って鈍重に走り続けている。雨はあいかわらずの土砂降りだった。七瀬が夕方、この汽車に乗った時からずっと続いている豪雨である。

七瀬は窓の外を眺めた。薄暗い車内燈に照らし出された崖の地肌が、彼女の眼の前を右から左へと流れ続けていた。この豪雨では、ほんとに崖くずれがあるかもしれない、と七瀬は思った。夢を思い返し、不吉な予感に襲われた。

崖くずれがあるのではないだろうか。

この列車は崖くずれにあつて転覆するのではないか。今の夢はその予兆ではなかっただろうか。あれは数分後、数十分後にこの列車の乗客を襲う現実の惨事だったのではないか。

わたしには未来を予知する能力があるのかもしれない、と七瀬は考えた。精神感應能力者である彼女に、透視とか予知とかいった他の超能力が備わっている可能性は考えられないことではなかった。

超能力の持ち主でなくてさえ、自分の死や、自分が将来出会う筈の事件を予知した例は多い。予知というはつきりしたものではなく、不吉な予兆におびえたという話なら数限りなく聞かされてもいる。

意識の深層が未来に起る事件を捕捉し、検閲を突破してその情景を夢にだれ込ませたのではないだろうか。七瀬は考え続けた。ユングという心理学者は、夢に含まれている予言的な性格を認めている。醒めている間は意識にあらわれないさまざまな材料を、夢は組み立て、未来への適応策としてその人間に暗示するというのがのだ。

では、七瀬にとって、今見たばかりの不吉な夢を形成した材料とは何だったのか。

ひとつは過去のさまざまな崖くずれの事故や、列車の脱線事故、転覆事故に関する数多くのニュースであつたろう。そしてもうひとつは、今、七瀬自身の乗っている列車が崖の多い山の中を走っているという事実である。母の実家に帰ろうとするたび七瀬が乗るこの列車は、あと一時間ほど崖の下を走り続けるのだ。もちろん、いつ崖くずれが起つてもちつとも不思議ではないとまで言われている危険な場所を何力所か通過しなければならぬことも七瀬は知っている。そして豪雨は、すでに五時間以上も続いていた。

次の駅でいったん降り、様子を見ることもできる。しかしその場合、田舎の駅の小さな待合室で明日の早朝まで次の列車を待たなければならぬ。七瀬は考えこんだ。

単に夢として片付けてしまうには、その夢はあまりにもなまなましかった。悲鳴や怒号の迫真性、情景の精密さに加え、その夢には夢特有の誇張や歪曲わいぎよくがまったく見られなかったからでもある。

七瀬は他の乗客たちの様子をうかがった。

車内は満席だった。

彼女の向い側の席にいる若い工員は、まだ七瀬の様子をうかがい続け、つけこむ隙を見つけ出そうと躍起になっていた。自分の餓えにぎらぎらした視線が彼女に嫌悪感をあたえるのではないかといったような心遣いは、その若い狼おおかみには無縁だった。狼にとって七瀬は餓えを満たす対象のひとつでしかなく、だいたいそれ以前に彼は、女に人格というものがあることなど想像したこと

さえないようだった。七瀬は何度も、彼に犯されている自分の姿を見せつけられていた。

若い男たちが自分を見て心に浮べる想念を、七瀬はすでに無視できるようになっていた。むしろ、なんとも思わない男に出会ったりするとかえって驚いて、逆にその男の意識を深く観察する気になったりした。当然のことだが、男たちはすべて色欲に関して貪欲^{どんぐ}だった。目前に迫った破産を案じ続けている男でさえ、七瀬を見ると心の中で彼女を裸にしはじめなのだ。七瀬はそういった男たちの非社会的、非道德的な情意を、最近ではある程度理解し、許せるようになっていた。男にとってなくてはならぬものと認めてもいた。しかしやはり、眼の前にいる男が心の中で突然裸の自分に突拍子もない恰好をさせたりすると腹が立った。

「眠れないのかい」狼が、馴れなれしく話しかけてきた。

どの男もそうだが、機械工をしているこの若者も、なかば本気で七瀬のことを（こんな女、おれが本気になればいつでも誑^{おど}しこめる）と思っていて、七瀬はそれが頼^{たの}だった。その分不相応な、あきれるほどに過剰な自信をうち砕いてやることは簡単にできるし、それが彼のためになるのかもしれなかったが、同時にそれには大きな危険が伴う筈だった。

つけこむ隙をあたえぬよう、彼女は返事をしないことにした。

わざと粗末な洋服を着てきたため、見くびられたのだろうと七瀬は判断した。だからといって盛装して汽車にひとりで乗ったりすれば、貧しい田舎町の若者は敬遠してくれるかもしれないが、そのかわりにまた別種の男たちの興味の対象となり、つきまとわれることになる。どちらかといえはその方が危険だった。

男たちの意識を読みとることで七瀬は、今年やと二十歳になった自分の持っている美貌と肉体的成熟度を、己惚れを混えずほぼ正當に評価することができなのだ。彼女がやや控えめに自分にあたえた美女としての評価は（それがどんな美人コンテストであっても、三位以下になることは滅多にない程度の美人）であった。彼女自身それを誇っているのかどうかは、まだよくわからないでいた。彼女の意識に流れこんでくる男たちのエロチックな思念をわずらわしく思うことがあまりにも多すぎたためである。

七瀬が答えないため、狼は苛立ち、腹を立てていた。（お高くとまりやがって。お高くとまりやがって）汚ない爪を噛みはじめた。

「それにしても、ひどい降りようですねえ」

七瀬の隣の初老の男が、しらけた雰囲気と、ふたりの間の気まずさを救おうとして、誰にともなく、吐息とともにそうつぶやいた。むろん、七瀬と若者を意識してのことばである。彼は夜汽車に乗るには上等すぎるほどの背広を着ていたが、さほど金持ちというわけではなく、お洒落が自慢の、文化人を気取っている男だった。実際は小さな喫茶店をふたつ経営しているだけなのである。

狸だわ、と、七瀬は、この紳士が隣席に腰をおろした時からそう思っていた。この男の意識内容の低劣さは、身の毛がよだつほどであった。地方の小都市へ行くたび、この種の男に七瀬は必ず出会っていた。

それでも、精神感應能力を持たない人間の眼には、狸紳士が温厚な山羊に見え、狼青年がスマ

トな牡鹿に見えるであろうことも七瀬は知っていた。

「ほんとですなえ」と、青年の隣の中年女が、ま向いの紳士にあいづちをうった。「崖くずれでもなきや、いいんですけどねえ」野卑ながら、声だった。

通路をへだてた席で小説雑誌を読んでいた神経過敏の青年が、一瞬びくつとしてから横目を遣つて中年女を睨みつけ、顔をしかめた。

狸紳士は、こういう場所でそんな話題を持ち出した中年女の非常識さをたしなめようとして、あからさまに眉をしかめ、かぶりを振って見せた。「ま、そんなことはないでしょう」

「いえいえ、あなた。それが、そんなことがあるんですよ」

中年女には文学青年のしかめっ面が意味するものも狸紳士の渋い顔の意味も、ぜんぜん通じてはいなかった。彼女は、この好感の持てる上品そうな紳士の興味を呼び醒ましそうな話題を見つけたことで少し有頂天になっていたし、さらに、彼女自身が今一番おそれていることを話して周囲の人間も怖がらせ、崖くずれの恐怖を他の乗客たちとわけあい、共有することによって自分が安堵を得ようとしていたのである。彼女はこの付近に昔から崖くずれが多いこと、今年になってからも国道の方では数件の事故があったことなどを大声で喋りはじめた。

（やめろ、と一喝してやろうか）文学青年がいらいらして、そんなことを考えていた。（もつとも、怒鳴りつけたところで、この馬鹿女のことだから、なぜ怒鳴られたかわからないできよとんとするだろうが）

ますます大きくなる中年女のおひるのような声は、七瀬に頭痛を起させた。

あひると、狸と、狼か、七瀬はそう思い、苦笑した。この程度なら、我慢できないことはない
と自分に言い聞かせた。別の座席に移っても、かえってそこには凶暴な虎や豹や、さらには形容
しようのない怪物までいるかもしれないのである。

狼青年の方は、中年女のお喋りなどには耳も貸さず、ただ一心に七瀬を犯す手段を考え続けて
いた。

（便所へ行きやがらねえかな。そうしたらあとを追いかけていって、無理やり便所でやっちまう
んだが）

驚いたことにこの若者は、同じ工場の女工員を便所で犯したという痴漢顔負けの経験を持って
いた。

困ったことになった、と、七瀬は思った。さっきから便所へ立ちたいのを、不潔さがいやで辛
抱し続けていたのだ。だが、いずれは行かなければならない。まさか進行中の列車内の便所で犯
されることもあるまいが、そんなところにまでつきまとわれるのは我慢ならなかった。

夜汽車は豪雨の中を走り続け、列車の屋根を叩く雨の音はもはや轟音と化していた。そして列
車は、崖ぐずれの危険があるとされている最初の山道へ駆けこんでいった。その地帯へ入ると列
車の震動までがなんとなく違って感じられ、無気味だった。地盤が柔らかいからかもしれない、
と七瀬は思い、そんな馬鹿なことがある筈はないと打ち消した。だが、おびえは、いつまでも心
から去らなかつた。

窓外の崖の斜面には植物らしいものが見られず、ただ崖の地肌だけが時には赤く、時には黒く、

右から左へと流れていた。赤いのが赤土、黒いのが岩だろうか。七瀬は想像した。

「それでねえ、その時には女の人ふたりと子供ひとり、岩の下敷きになって死にましてね」あひる女はまだ喋り続けている。崖ぐずれをおそれながらも、現在、いちばん危険な地帯を通過中なのだという知識は持っていなかった。

あひる女の饒舌に辟易した狸紳士が、七瀬に話しかけてきた。「あなたはどちらまでですか」「篠田口です」

「ほう。次の駅ですな」狸が七瀬をじろじろと見た。

彼は、自分が可愛がつている彼の店のウエイトレスと七瀬とを心の中で比較していた。彼が経営しているその喫茶店は、ふたつとも篠田口よりもふた駅ばかり先の駅の近くにある。そしてまた篠田口の駅前には、彼がそのウエイトレスを最初につれこんで思いを遂げた旅館があり、彼は今、その旅館へ七瀬をだましてつれこむことができるかどうかを検討しはじめていた。

「篠田口へ着くのは、十二時半になりますよ」と、彼は心配そうにいった。「そこからどちらへ。この時間だと、もうバスもないだろうし」(篠田口で、この娘と一緒におりてやろう)

狼が眼をぎらぎらさせ、七瀬の返事に聞き耳を立てた。

「いえ、大丈夫です」と、七瀬は答えた。「家は、駅の近くですから」

「それにしても危ないですな。夜道のひとり歩きは」

自分の方がよっぽど危ない癖に、と、七瀬は思った。

(篠田口でおりてやろうか) 狼も、そう考えはじめていた。(家まで送ってやるといって途中で

無理やり)

遅い時間の列車に乗ってしまったことを、七瀬は今さらのように後悔した。昼間、美容院へ行かなければよかった、美容院など、篠田口にだってあったのに、多少混んでいても、もっと早い列車に乗ればよかった。

お手伝い稼業をきっぱりやめた機会に、ついでに少女っぽい髪型もやめて以来、つまらないとは思いつながらも、他人に見苦しい印象をあたえるのを嫌って七瀬は七日に一度、必ず美容院へ通っていたのである。

「でも、駅前でタクシーを拾いますから」七瀬はそう答えた。

篠田口駅前には、最後の列車が着くまで二、三台のタクシーが必ず待っていることを七瀬は知っていた。

「しかし、気をつけた方がいいですよ」狸紳士はあきらめず、七瀬をおどし続けた。「篠田口の運転手には、ずいぶん悪質なのがいいますからね」

なんならわたしの知りあいの旅館に紹介してあげましょうか、と、もっともらしい顔つきを作つて紳士が言おうとした時、中年女の背後の席に寝かされていた子供が眼を醒まし、声をあげて泣きはじめた。

わたしと同じような怖い夢でも見たのだろうか、と、七瀬は思った。そつと子供の心に触手をおぼして観察すると、やはりそうだった。その三歳になる男の子の見た夢は、怖い夢というよりは一種の驚愕夢であつた。そして、はげしくおびえていた。あまりにもおびえかたがはげしく、